

H 2 6 年度  
「患者と家族のがん研究基金」実績報告会  
Cancer Research Funds for Patients and Family

プログラム抄録集

日 時 平成 27 年 5 月 22 日  
午後 7 時 00 分 (総会終了後)

場 所 千葉県文化センター 9 階会議室

主催 NPO 法人 医療・福祉ネットワーク千葉

## ～次 第～

◇ 開会の辞 竜 崇正 (理事長)

◇ 司会・成果発表座長

### 1、『音楽はがん患者への癒しの治療となるか—がん患者への個別音楽療法に関する研究』 千葉県がんセンター 音楽療法士 長島 律子

音楽の聴取(受動的音楽療法)や歌唱(能動的音楽療法)による癒し効果については、一般的に、患者さん・ご家族から寄せられた言葉を基に評価されているが、客観性は得られていない。そこで、音楽療法の効果を科学的に証明するため、近年多くの研究により明らかになってきた唾液アミラーゼ活性値の変化、ならびにVAS法による気分評価表の解析結果を用いて検討する事とし、準備等を進めてきた。内視鏡検査をはじめ各種医療行為における心の緊張や身体的な苦痛の緩和に音楽療法が有効かどうか検討を進めたい。

### 2、『Lynch症候群の表現型・遺伝子変異相関データベースの作成と病態解明』 千葉県がんセンター研究所がんゲノムセンター 横井 左奈

Lynch 症候群は、大腸がん全体の1～5%を占める常染色体優性遺伝の家族性腫瘍である。若年発症、多臓器にわたる複数のがん、子どもへの遺伝といった特別な状況に置かれているため、適切な遺伝医療の提供が必要である。一般診療のなかでは同定が困難な本疾患を見分けるために、遺伝外来を立ち上げ、分子診断によるスクリーニングを開始した。個人の遺伝情報に応じた医療の提供を目指している。

### 3、『大腸がん腹膜播種におけるスフィンゴシン1リン酸とがん進展および新規治療薬フィンゴリモドのがん抑制効果の研究』 千葉大学大学院医学研究院先端応用外科 青柳 智義

フィンゴリモドは、スフィンゴシンのアナログでありスフィンゴシン1リン酸1型受容体受容体の機能的アンタゴニストである。スフィンゴシン1リン酸は細胞の増殖、細胞の浸潤、血管・リンパ管の新生、リンパ球の輸送、サイトカインの産生など、多くの細胞プロセスを制御している。この研究ではフィンゴリモドのマウス腹膜播種を用いて大腸癌腹膜播種に対する進展の抑制効果および他の抗癌剤との併用効果につき研究した。

#### 4、『大腸がん層別化による発がん分子基盤の解明』

千葉大学大学院医学研究院分子腫瘍学 金田篤志

大腸癌は BRAF 変異と強く相関する高メチル化大腸癌、KRAS 変異と強く相関する中メチル化大腸癌、および低メチル化大腸癌の3群に層別化される。今回大腸癌 *de novo* 経路である大腸側方型進展腫瘍(LST) を解析した。高メチル化、BRAF 変異はほとんど認めず、LST は2群に明瞭に層別化された。中メチル化群は顆粒状 LST、KRAS 変異(+)、CTNNB1 蓄積(-)と強く相関。低メチル化群は無顆粒状 LST、KRAS 変異(-)、CTNNB1 蓄積(+)と強く相関。*De novo* 経路発癌に2つの異なる分子機序が存在した。

#### 5、『発がん和形態形成におけるヘッジホッグシグナリングの解明』

千葉大学大学院医学研究院小児病態学 藤井 克則

ヘッジホッグシグナルは高度に保存された形態形成と発癌に関与する経路である。ヒト線維芽細胞を用いた実験により血清飢餓とリガンド存在下でこのシグナルが相乗的に亢進し、抗腫瘍薬の *vismodegib* によりこのシグナルが最も効果的に抑制されることが判明した。本経路の亢進に伴う腫瘍は数多くあり、皮膚線維芽細胞を用いることで抗腫瘍効果を予測することが可能になると考えられた。

◇ 閉会の辞 竜 崇正 (理事長)